縁辺化の進む地域における高校生の将来展望と地元志向
――自己の創発に着目して――

窪田 玲奈（北海道大学大学院・博士課程）

近年、全国の若者の移行の困難に焦点を当てた研究が増えてきている（例えば乾彰夫氏ら）。進路形成にあたって、家庭における経済・文化資本の多寡に加え、若者を包む労働環境、現代の社会文脈の問題が大きく顕在化してきている。また、地方と都市の就業構造の違いから、地域間格差へ目を向ける必要性も示唆されてきている（李永俊・石黒格 2008, 上間陽子 2007）。

本報告では、北海道の空知管内に位置する夕張高校の 3 年生に焦点を当て、アンケート調査（2009 年 7 月実施、夕張高校 3 年生 2 クラス 57 名の回答）とインタビュー調査（2009 年 9 月実施、夕張高校 3 年生 15 名）の結果を基に考察していく。

夕張は旧産炭地であり、炭鉱が閉山した後は主たる基幹産業が抜け落ち、地域経済の衰退が著しい。現在は財政再生計画の下、粛々と返済計画が進められている。地域経済の衰退は、高校卒業・学卒後の地元への就業を困難にし、生徒達に外へ出るという選択を迫っている。同時に生徒達の親の家計を逼迫し、進路形成時の選択に影響を与えている。

これまで、若者、青年の成熟について「移行」や「発達」という言葉を用いて語られるきらいがあったが、現代社会では確固としたルートが用意されているわけではない。若者達は「自前の『移行』」を作り出さなければならないのだ（中西新太郎・高山智樹編，2009，『ノンエリート青年の社会空間』，大月書店）。縁辺化の進む地方都市の場合、地理的な断絶と地方の貧困により、子ども―大人間の非‐連続性はより大きなものとなる。そのため、外の世界、社会に出ていく際に、今までの自分から新たに〈創発〉、〈跳躍〉していくことが迫られるという点に着目して考察する。

情報網の発達、消費の拡大、車の普及により、地方においても意識の絶え間ない都市化に巻き込まれる。そのことは、「『ホーム・ワールド』の自己完結性と信憑性を弱める」と同時に「精神を拡大」させもする（P.L.バーガーら『故郷喪失者たち』）。「内／外」の境界を超えることのできる脱場所化の可能な時代に、地元である夕張の「内／外」の揺れ（オッシレート）(oscillate)を伴いながらも、どのような将来展望を持ち、自らの進路を切り拓いていくのか。18 歳を契機に、今まで暮してきた地元である「夕張」に対する想い、「地元志向」がどのように立ち現れてくるのかについて考察していく。